所長任期満了にあたって

3期6年間所長職を務めて参りました。当初は先代、先先代の所長に支えられながら、6人体制で研究所の運営を引き継ぎ、古い伝統を守りながら、研究所を取り巻く環境に対応してまいりました。研究所の国際化を図るべく、国際の研究所との交流を深めようと、吉林師範大学の東亜研究所との交流協定を締結することになり、幸い当時は日中関係も良好で、国際交流センターの協力を得て順調に締結することができました。他の国の研究所との交流も試みましたし、ヨーロッパ諸国は九州問題や大学改革などで、交流協定を締結するまでには至りませんでした。お二人の定年を前におそって、その後も6人体制を維持すべく大学に要望をしてきましたが、定員4人の数は動かせないとのことで、4人体制で運営することになった矢先、突然、同僚との永遠の別れに遭遇し、補充人事として、新人の採用準備に入り、なんとか定員の4人体制を維持することができ、研究所の出版事業の継続も確保できることになりました。研究所の主な事業として、研究部会による研究会、年4冊の「東洋研究」の発行、秋の公開講座の開催、研究部会の研究成果の出版、国際交流事業の一環としての外国人講師による講演会、国際交流シンポジウムなどの共催など、管理委員の諸先生方のご意見や協力を得て運営して参りました。予算削減の中、研究部会の皆様には十分な予算確保もできず、手当の増やしでは困らされております。特に入会の先生方や研究者から「東洋研究」の英文化や以前発行しておりました英文の論文集「EX ORIENTE」の復刊を希望するご意見もいただき、いろいろと外国人の立場から協力をして頂くことになり、外国人による研究部会が新しく発足しました。それを受け英文の論文をできるだけ「東洋研究」に掲載し、海外にも研究成果を発信していきたいと思っております。しかし、学部配置研究所の組織改革の問題や、大学改革をかけての改革など、大学の研究母体として発足した東洋研究所を取り巻く環境を変化する中、大学の研究所としての役割は、学部の枠を超えた学際的な、国際的な研究成果を発信していくことが重要であると考えております。正直なところ、この原稿を書いて所長職を無事終わることができると安心しておりますが、専任研究員の不祥事が発生し、研究所内は決して、管理委員の諸先生方には感謝しいと申すことができず、大学当局にもご迷惑をおかけすることになってまいりました。今後も展開が見込まれますが、一応の解決を見ることでは責任を持ちたいと思っております。研究者の皆様にはいろいろご協力をいただき支ええて頂きましました。この場を借りて御礼申し上げます。定年まで専任研究員として、研究所の発展に努力しながら努力していく所存でございます。今後ともご支援、ご協力をお願いいたします。

（2014年12月）
公開講座「アジアの民族と文化」

2014年度（第30回）東洋研究所公開講座は、「アジアの民族と文化」を統一テーマに下記の通り開催された。
受講者総数は延べ69名（一般58名、教職員11名）で、各講座の概要は以下のとおりである。
なお、長年ご出席いただいた方に対して行っている表彰状の授与は、今年は4名の該当者がいた。

◇第1回 11月6日（木）13：00～15：00 大東文化会館3階 K-0302研修室
テーマ：東アジアにおける暦（カレンダー）の文化と制度
講師：田中良好（東洋研究所専任講師）

我々が日常的に用いる暦には、どのような由来があり、誰が初めて書いているのか？そうした日常的な疑問を出発点として、中国における暦の性質や思想文化から見た暦の意義について解説し、日本における暦の需要と展開、間近は明治改暦から現在に至る暦の実態について紹介した。

中国の暦の源流は、殷代の甲骨卜辞に見られる。それはすでに、干支によって日を数え、朔望月によって月を数え、十二ヶ月を一年としながらも、なお間月を設け、一年を一太陽年に近づけようと工夫されたものだった。これは太陰太陽暦という種類の暦であり、殷王朝以降、二十世紀の初めに清王朝が滅ぶまで、約三千年の間、中国で用いられ続けて続ける暦の基本モデルである。

そもそも中国の思想文化においては、「周易」の繋辞伝下伝や「尚書」の礼典・儀典に見られるように、地上を統治する君主は、天に従を認められ、天命を受ける存在であり、天に順うことは当為であり必要であった。その具体例の一つが、天体を観測し、季節の推移に順い、それを可視化した暦を作成し、それを授ける「観象授時」によって民のいとなみ（農耕）を支え、治世に役立てることだった。

そのため、暦は単なる農耕の便を図るという目的ではなく、その時代の統治者が必要とする王が、天の意志に順っているのか背いているのかを見定める一種の基準としての価値を持って存在し、暦の作成は、天命を受けた天子である皇帝の義務であり、権限でもあった。

これにより、暦は無念の運行や、月日食の推算を含む暦は、どんなに高精度のものでも次第に誤差が生じるため、二三百年が使用年数の限界となる。また、新たに天命を受けた王朝は制度を改めなくてはならない。とする「受命改制」という思想があり、中国では頻繁に改暦が行われた。紀元前104年の中太初改暦から辛亥革命が起こる1911年までに、中国では約48回の改暦が行われ、平均すれば約40年に一回の改暦である。

日本では百済経由で伝わった南朝の元嘉暦を推
アジアにおけるヨーロッパ勢力による領土支配は18世紀になって本格化したとされる。とくに16世紀のヨーロッパ勢力の目的は、当時さかんだったアジア間交易への参入で、領土支配はほとんど行われていなかったし、重要でなかったと考えられている。これに対して、第2回講座では、ポルトガル領アオアを取り上げ、16世紀における領土支配のはじまりとその重要性について検討した。

まずポルトガル領アオアにおける領土支配構想とその展開を確認した。アオアは1510年、ポルトガル領インドア州総督アフォンソ・デ・アルブケルケによって占領され、支配が始まった。アルブケルケは最初からアオアを領土として認識していた。彼は占領後、現地人を利用し、住民から税を集めさせた。ポルトガル当局はこの構想を引き続き、徴税制度を確立していた。やってアオアには31の在地村落があり、そこから年貢が納められていることが分かった。これをうかげて、当局は、「タナダール」と呼ばれる徴税官を設置し、在地村落から年貢を集める制度を完成させた。

次に、アオアにおける領土拡張について確認した。ポルトガルの領土支配はアルブケルケが占領した地域に留まらなかった。ポルトガル当局はポルトガル領アオアの拡大を図っていたのである。1520年代にはすでにアオアから内陸へ進出し、1548年には同地でパルデスとサルセットという新地を獲得した。

最後に、こうした領土支配がどの程度重要だったのか、税収の面から検討した。1543年から1553年までのポルトガル領インドアの財務記録によれば、当局がアオアで集めた税は、年貢のほかに、関税や商品・サービスに関する税があった。このうち年貢が占める割合は、1543年から1547年までのはず数パーセントだったが、1548年以降は数十数パーセントまで上昇し、このことから、1548年に内陸のパルデス・サルセットを獲得してから、年貢がポルトガル領アオアの主要な税源となったと考えた。また、アオアの財政バランスを確認すると、年貢で同地の支出をまかなえたことがわかった。この点からも、年貢が植民地運営、非常に重要な税となっていたことがわかった。

以上の検討によって、ポルトガルがアオアを占領したときから領土支配を行なったこと、さらに領土を拡大しようとしていたこと、そして税収の観点からみて領土支配が非常に重要だったことが示された。これをふまえて、本講座では、アジアにおけるヨーロッパ勢力による領土支配は16世紀にはじまり、かつ重要な政策のひとつだったと結論づけた。
2014年、アフガニスタンは同国内の選挙による国家元首の交代が行われた。4月に第一回の選挙、そして6月の決選投票を経て、2001年以降アフガニスタンを率いてきたカルザイ大統領の後任としてアシュラフ・ガニ大統領が選ばれた。同国史ははじめ選挙によって国家元首が交代した瞬間である。

アフガニスタンの国内政治の動きがある一方で、タリバン政府は崩壊した2001年以降、13年間渡り国際社会による対話し実施がなされてきたが、国内ではタリバンをはじめとする反政府武装勢力との戦闘が未だに続いている。

本講義では、このようなアフガニスタンの政治的動きを観察したうえで、農村社会に暮らす人々の今後の焦点を当てて、現代アフガニスタンの一端を紹介することを目的とした。

アフガニスタンは、中国を含む新日本の隣国であり、地理的にもローマンスーパーソンは日本に近い位置にある。しかし、私たちは認識において、ローマン超人はさらに近い国のように思われている。

他方、アフガニスタンの人々は非常に親日である。アフガニスタンは1839年から42年にかけての第1次アフガン戦争、1878年から80年にかけての第2次アフガニスタン戦争、そして1919年の第3次アフガニスタン戦争で英国と戦い、1979年から89年までに世界戦争のアフガニスタン侵攻に抗して戦ってきた。アフガニスタンの人々にとって、日本はアフガニスタンと同様に、中東や中東戦ったアフリカの兄弟国とみなされている。そして米国と戦い、原爆を2発落とされてもなお世界第2位の経済大国として復活した日本に対して尊敬の念を抱いている。首都カブールの街にはトヨタの車両がほとんどを占め、人々は日本製の車両に高い信頼を置いている。

そのような人々の暮らすアフガニスタンは、1970年代からの対ソ戦、そして内戦の影響で、世界最貧穏国の一国となっており、また、最も汚染が深か国の一つともなってしまっている。内戦等によって農村部での基幹インフラである瀬戸の多くが破壊されるとともに、社会的には「軍閥」と呼ばれる武力を背景にした野戦司令官たちが国内に多数生まれた。2001年以降のアフガニスタンの新政府は、これら農村を中央政府に取り込みながら、非常に強力な大統領制の下で国政の安定再建を図ってきたといえる。

首都カブールでは、新しいビルや豪華な家が次々と建設されるような発展がみられる一方で、農村部では、家屋が破壊されたまま住民が未だに帰還できないなど、紛争の影響が色濃く残っている。筆者が現地で行った調査において、村人たちに生活での問題を聞けば、多くが「経済状況（雇用、収入）、農業のための「水」、そして家電や子供たちが夜勉強するための「電気」を指摘していた。村人たちが自らと家族の生活の維持・改善に取り組んでいる様子がよく分かる回答であった。また、農村部には内戦前から営まれてきた伝統的指導者会議（シューラ・ジルガ）が存在している。筆者が調査を行ってきたカブール北方では、シューラと呼ばれる地域指導者たちによる会議体は、村人たちによって選ばれた代表によって構成され、村の運営に当たっている。シューラでは、村における公共施設や灌漑施設の建設や運営、村における日常的な処理、さらには、内戦中にはいずれかの陣営に聞くかの選択など、村人たちが、中央政府がどのようにしようとも、村のことを自らで運営してきた歴史を持っている。

ここに、外国人が外から持ってきた「民主主義」や「ガバナンス」などの概念と、アフガニスタンの村が行なってきた「合議」、「合意一致での村の運営」という国や個人の相互理解が重要であるという、外部者である私たちは理解する必要があると思われる。どちらがよいか、どちらを政治制度の土台とすべきか、等は、外部の者が単純に価値判断をして、決めることはできないように思われるのである。

アフガニスタンは、そこに暮らす人々や社会、そして非常に親国であることなどが報道されることよりも、対テロ戦争やアル＝カイダとのつながりが多く報じられている。本講義が、アフガニスタンへのさらなる興味や関心への契機となれば幸いである。
<table>
<thead>
<tr>
<th>巻号</th>
<th>発行年月日</th>
<th>著者</th>
<th>論文</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>172</td>
<td>20090725</td>
<td>大谷 光男</td>
<td>天皇即位の冕服に関わる文献について</td>
</tr>
<tr>
<td>173</td>
<td>20091125</td>
<td>小林 春樹</td>
<td>「漢書」「元后伝」 「王莽伝」の構成と述作目的</td>
</tr>
<tr>
<td>174</td>
<td>20091225</td>
<td>福田 俊昭</td>
<td>「朝野新報」に見える誹謗誹謗伝</td>
</tr>
<tr>
<td>175</td>
<td>20100125</td>
<td>岡崎 邦彦</td>
<td>1937年西北善後処理問題（上）—張学良挙動による西安と南京の対立—</td>
</tr>
<tr>
<td>176</td>
<td>20100725</td>
<td>松本 照敬</td>
<td>ラマーナー思想の研究（6）</td>
</tr>
<tr>
<td>177</td>
<td>20101125</td>
<td>蔵中弥のふ</td>
<td>三つの道真伝—「道真伝」三部作における隆尊伝—道真伝—</td>
</tr>
<tr>
<td>178</td>
<td>20101225</td>
<td>安保 博史</td>
<td>色人村「世つるもきに宗家のやとりか」考—芭蕉説話化の一過程—</td>
</tr>
<tr>
<td>179</td>
<td>20110125</td>
<td>兵頭 徹</td>
<td>海軍省調査課・勧奨の役割（五）—各種懇談会・研究会の活動—</td>
</tr>
<tr>
<td>180</td>
<td>20110725</td>
<td>大杉 由香</td>
<td>日本におけるNP3、NPOの現況と問題点—努力比較を通じて見えてきた課題—</td>
</tr>
<tr>
<td>181</td>
<td>20111125</td>
<td>相田 濱</td>
<td>六国史のキツネ—その祥瑞と怪異をめぐって—</td>
</tr>
<tr>
<td>182</td>
<td>20111225</td>
<td>渡邉 義浩</td>
<td>西晋「儒教国家」の限界と王室の乱</td>
</tr>
<tr>
<td>183</td>
<td>20120125</td>
<td>新里 孝一</td>
<td>ケアと＜注意力＞＝S・ウェイユをめぐって—</td>
</tr>
<tr>
<td>184</td>
<td>20120725</td>
<td>柴田 善雅</td>
<td>第1次大戦期日本政府の戦争海上保険介入</td>
</tr>
<tr>
<td>185</td>
<td>20121125</td>
<td>濱 久雄</td>
<td>幸得春台の易学思想</td>
</tr>
<tr>
<td>186</td>
<td>20130125</td>
<td>小坂 晴二</td>
<td>十一世紀末の怪異五式古文について（下）</td>
</tr>
<tr>
<td>187</td>
<td>20130725</td>
<td>山下 克明</td>
<td>陰陽道の特質と関係典籍</td>
</tr>
<tr>
<td>188</td>
<td>20131125</td>
<td>田辺 清</td>
<td>ルネサンス絵画と中国陶磁器（II）</td>
</tr>
<tr>
<td>189</td>
<td>20140125</td>
<td>福田 俊昭</td>
<td>「朝野新報」に見える誹謗誹謗伝</td>
</tr>
<tr>
<td>190</td>
<td>20140725</td>
<td>小林 春樹</td>
<td>「漢書」帝紀の著述目的—「高帝紀」から「元帝紀」を中心として—</td>
</tr>
<tr>
<td>191</td>
<td>20141125</td>
<td>兵頭 徹</td>
<td>海軍省調査課・勧奨の役割（六）—海軍に正しい世界観を求めて—</td>
</tr>
<tr>
<td>192</td>
<td>20150125</td>
<td>松本 照敬</td>
<td>ラマーナー思想の研究（7）</td>
</tr>
<tr>
<td>193</td>
<td>20150725</td>
<td>成田 守</td>
<td>「御船図」について</td>
</tr>
<tr>
<td>194</td>
<td>20151125</td>
<td>安保 博史</td>
<td>儀礼事例と李白伝説—丸坊蔵「花火祭で美人が酒に身投げけん」考—</td>
</tr>
<tr>
<td>195</td>
<td>20160125</td>
<td>門倉 登志</td>
<td>ラビノンダラート・タゴールの思想と行動—タゴール生誕五十周年によせて—</td>
</tr>
<tr>
<td>196</td>
<td>20160725</td>
<td>大杉 由香</td>
<td>戦前日本における火災問題—過去の火災は現在に何を物語るのか</td>
</tr>
<tr>
<td>197</td>
<td>20161125</td>
<td>小澤 浩二</td>
<td>戦後の公的職業訓練制度の確立とその諸問題—一日経過と総覧の動きから—</td>
</tr>
<tr>
<td>198</td>
<td>20170125</td>
<td>小坂 晴二</td>
<td>御船御舟と陰陽道</td>
</tr>
<tr>
<td>199</td>
<td>20170725</td>
<td>中村 聰</td>
<td>中国近代化における西欧宣教師の影響—民主思想の紹介—</td>
</tr>
<tr>
<td>200</td>
<td>20171125</td>
<td>柴田 善雅</td>
<td>東漸洲産業株式会社と周辺会社の活動—「鮮満一体」経営を超えて—</td>
</tr>
<tr>
<td>201</td>
<td>20180125</td>
<td>岡崎 邦彦</td>
<td>1937年西北善後処理問題（中）—南京側と西安側の交渉と内戦危機—</td>
</tr>
<tr>
<td>202</td>
<td>20180725</td>
<td>齋藤 稔一</td>
<td>タウンガー王朝とアッサリヤ王国の抗争における火器の役割（1498年—1605年）</td>
</tr>
<tr>
<td>203</td>
<td>20181125</td>
<td>新里 孝一</td>
<td>ケアと＜注意力＞＝S・ウェイユをめぐって—</td>
</tr>
<tr>
<td>204</td>
<td>20190125</td>
<td>大谷 光男</td>
<td>金印陶磁「漢委奴国王」に関する管見</td>
</tr>
<tr>
<td>205</td>
<td>20190725</td>
<td>渡邉 義浩</td>
<td>王莽の革命と古文学</td>
</tr>
<tr>
<td>206</td>
<td>20191125</td>
<td>池田 雅典</td>
<td>光武帝の西顧「信幸」</td>
</tr>
<tr>
<td>207</td>
<td>20200125</td>
<td>高橋 康浩</td>
<td>林昭「漢書音義」・孫詒讓の「漢書解」</td>
</tr>
<tr>
<td>208</td>
<td>20200725</td>
<td>滨 久雄</td>
<td>清代における漢易の展開一懸論の「易學派」を中心として—</td>
</tr>
<tr>
<td>209</td>
<td>20201125</td>
<td>福田 俊昭</td>
<td>「朝野新報」に見える誹謗誹謗伝（前編）</td>
</tr>
<tr>
<td>210</td>
<td>20210125</td>
<td>小林 春樹</td>
<td>「漢書」の正統観・漢王朝観について—板野長八の理解の再検討—</td>
</tr>
<tr>
<td>211</td>
<td>20210725</td>
<td>高橋 康浩</td>
<td>林昭と神秘性＝儒教との関わりを中心として—</td>
</tr>
<tr>
<td>212</td>
<td>20211125</td>
<td>松本 照敬</td>
<td>ラマーナー思想の研究（8）</td>
</tr>
<tr>
<td>213</td>
<td>20220125</td>
<td>橋口 明子</td>
<td>欧米茶書の中の東洋＝メソポタミア、パウリノ「茶書・茶論」研究</td>
</tr>
<tr>
<td>214</td>
<td>20220725</td>
<td>武田 知已</td>
<td>外務省と知識人・1944－1945（下）—「ジャポニカス」工作と「三年会」—</td>
</tr>
<tr>
<td>215</td>
<td>20221125</td>
<td>兵頭 徹</td>
<td>海軍省調査課と勧奨の役割（七）—国内思想戦と調査課ブレーン</td>
</tr>
<tr>
<td>216</td>
<td>20230125</td>
<td>門倉 登志</td>
<td>アメリカ帝国の形成と文化・イデオロギー＝アメリカ＝フィリピン戦争を中心に—</td>
</tr>
<tr>
<td>217</td>
<td>20230725</td>
<td>齋藤 稔一</td>
<td>ボルタガロイ賞インド・アラブの防衛と総督1546年の第二次ディウ包囲を事例に—</td>
</tr>
<tr>
<td>218</td>
<td>20231125</td>
<td>安保 博史</td>
<td>芭蕉供養の研究—元号期を中心として—</td>
</tr>
<tr>
<td>219</td>
<td>20240125</td>
<td>由川 稔</td>
<td>オユ・トルゴール、タパントゴール、新鉱道等、鋳業関連領域に見る、モンゴル国の市場経済の深化</td>
</tr>
<tr>
<td>220</td>
<td>20240725</td>
<td>柴田 善雅</td>
<td>中国関関関港地日系銀行の活動</td>
</tr>
<tr>
<td>221</td>
<td>20241125</td>
<td>岡崎 邦彦</td>
<td>1937年西北善後処理問題（下）—「2・2事件」と三井合の瓦解—</td>
</tr>
<tr>
<td>183</td>
<td>20120125</td>
<td>小坂 眞二</td>
<td>十二世紀代の怪異六壬式占文について（一）</td>
</tr>
<tr>
<td>------</td>
<td>-----------</td>
<td>------------</td>
<td>------------------------------------------</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>20120725</td>
<td>福田 俊昭</td>
<td>『朝野新書』に見える俳諧詩学（後編）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>201122126</td>
<td>隆永 宣孝</td>
<td>ロシィ革命後の露電銀行再建の挫折，1917 〜 1926 年</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>20121025</td>
<td>林 裕</td>
<td>アフガニスタン農村における現状と意思決定構造</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>201211225</td>
<td>小坂 眞二</td>
<td>十二世紀代の怪異六壬式占文について（二）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>20130125</td>
<td>小林 道彦</td>
<td>「演義」「五行志」における董仲舒の役割</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>20130730</td>
<td>田中 良明</td>
<td>北斗星占小牧</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>20131125</td>
<td>岡崎 邦彦</td>
<td>西安事変前の中国共産党と蒋介石国民党</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>20131230</td>
<td>小坂 眞二</td>
<td>両六壬占の十二術法と陰陽道（二）〜神事占の占点を中心に〜</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>20140125</td>
<td>大谷 光男</td>
<td>太歳庚寅鉄の鉄製大刀について</td>
</tr>
</tbody>
</table>

**注:** 具体的な詳細や背景情報は省略されています。
東洋研究所刊行物（2014年7月～2015年3月）

【機関誌】

□東洋研究　第192号（2014年7月25日発行）
岡崎青山・西安事変研究—事変発生と事態の変化—
田中寛…「満州事変読本」にあらわれた帝国の言語思想と異文化認識
植松恒久…中国語における新語の出現と社会的意義—『現代漢語詞典第6版』の語彙を中心として—
南里浩子…イラン南部・遊牧民定着村の歩み—1963年農地改革前後まで—
小林昭木…ライデン大学における東アジア研究の歴史と現在—中国学と日本学を中心として—
フレデリック・ジェラール…「講義要綱」の和訳の問題点
　—日本における初めての西洋哲学受容と土着信仰に適応の試みに着目して—

□東洋研究　第193号（2014年11月25日発行）
小坂真二…陰陽道の六壬占術　研究余滴（一）
渡辺信宏…禅僧考
福田俊昭…「朝野亀戸」に見える歴史学の役割（後編）
田中良明…北宋栄徳等撰『景祐乾象新書』諸本管見
中村士、イザベル・田中・ファンダーレン…本木良永が取調べた「関象観星鏡」の謎の解明へ

□東洋研究　第194号（2014年12月25日発行）
渡辺義浩…班田の賦税と「雅・頼」
小塚博…張騷と紅蘭主人の交友—書箱を手がかりに—
岡倉登志…岡倉覚三（天心）と西洋美術（その1）
齊藤俊輔…ボルトガル＝アジア間の往来と「登録制度」
エリオット・ミルトン…昭和天皇と東京裁判

□東洋研究　第195号（2015年1月25日発行）
相田満…日本における幼学書の発展の視点から見た『蒙求』—故事の発案基準をめぐる考察—
楽田善雅…シベリア出兵期対露貿易業者支援策と日露実業株式会社の活動
藤永宣孝…1920年恐慌と中国興業銀行の危機
中村聡…最後の期の祥書『防弾訓』の意味するもの
クリスティアン・W．シュピング…日独関係史再読—明治時代から昭和前半までの概論—

【刊行図書】

□図書類類集（巻88）臨時付索引（2015年2月28日発行予定）
　B5判　東洋研究所兼営研究員　中林史朗（代表）他8名共著

□『茶湯』巻7　注釈（2015年3月25日発行予定）
　B5判　東洋研究所兼営研究員　鶴中しこの他著

□『お茶を愉しみ』（2015年3月25日発行予定）
　B5判　東洋研究所兼営研究員　滝口明子著

※東洋研究所刊行物のうち、既刊の図書については、ホームページをご覧ください。

◇研究員消息◇

特別兼任研究員（第2班共同研究班）の安藤正士氏が2014年9月18日、兼任研究員（第6班共同研究班）の近藤正則氏が2014年7月19日逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。
東洋研究所の理念・目的

東洋研究所の起源は1921年の支那事変に対する「漢学振興二関スル建議案」の決議に由来する。この背景にある基本的理念は、①漢学を中心とする東洋学術の研究、②東西文化的融合による新しい文化の創造をめざすことにある。この理念実現の推進母体として1923年東京文化協会が創設され、研究組織として、①漢学を中心とする東洋学術の研究部門として東洋研究部を、②東西文化の融合による新しい文化の創造をめざす比較研究部を設け、教育機関として東京文化学院を設立した。この二つの研究部は1953年東京大学大東文化大学付属東文化研究所に継承され、1961年学校法人東京文化学院の創設計画の一環として、新たに「東洋研究所」として過去の①・②の理念を継続している。

東洋研究所の目的は、学則第6条に基づく東京大学大学東洋研究所規則に定められ、「アジアを中心とする人文・社会・自然の科学的調査研究を行い、広く学術の発展に寄与すること。」とされている。当初研究局第一部人文科学部と第二部社会科学部の2組織がおかれて、その後専任研究員の就任に伴い人文科学班、政治・経済班、国際関係班の3班に分かれて研究活動に入った。時代の要請に従い個人研究はもとより、学際的・総合的共同研究の重要性を強調し、学際的メンバーによる研究部会を設け、研究成果を学術雑誌「東洋研究」に掲載するとともに、刊行物を発行し世に成果を問うている。また、研究成果が地域社会の発展に寄与する作用を研究活動の一環として、外国人講師による講演会等学術の発展に寄与することを目的に活動している。

刊行図書取扱店

■汲古書院
〒 102-0072 東京都千代田区飯田橋 2-5-4
℡ (03) 3265-9764

■池上書店（大東文化大学板橋校舎内）
〒 175-8571 東京都板橋区高島平 1-9-1
℡ (03) 3932-7567

■進明堂（大東文化大学本部校舍内）
〒 355-8501 埼玉県東松山市岩殿 560
℡ (0493) 34-4430

大東文化大学東洋研究所所報 No.62
2014年12月25日発行

編集・発行　大東文化大学東洋研究所
〒 175-0083　東京都板橋区徳丸 2-19-10
TEL (03) 5399-7351　FAX (03) 5399-8756
E-mail : tokenji@ic.daito.ac.jp
URL http://www.daito.ac.jp
印刷 （株）東京技術協会